

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員(主査) 川口裕司 印

学位申請者 杉山 香織

論文名 フランス語学習者の発話における使用語彙分析

【審査結果】

杉山氏は本論文において、日本人のフランス語学習者がフランス語を口頭産出する際の使用語彙を詳細に調査し、母語話者と比較してどのような特徴が存在するかを研究した。論文の中では、日本人フランス語学習者の語彙特徴を、「語彙の豊かさ」、「特徴語」、「コロケーション」、「N-grams」という四つの観点から計量的および質的に分析した。

博士論文審査委員会は、提出された杉山香織氏の学位請求論文を慎重に審査し、最終試験(公開審査)を行った結果、全員一致で、同氏に博士(学術)の学位を授与するのが適当であると判断した。

【論文の概要】

審査対象論文は、序論に続く第1章から第8章が本論を構成し、第9章が結論、その後に参考文献および謝辞が記載されており、総ページ数は 369 ページである。以下に論文の根幹をなすと考えられる章を中心に、論文全体の概要を記す。

第一章ではコーパス言語学への導入が行われ、言語学におけるコーパスの意義、コーパス言語学の歴史、コーパス分析ツール、学習者コーパスとそれを用いた研究プロジェクトについて説明した後、コーパス研究全般を批判的に考察しつつ、その利点と欠点について述べている。

第二章では、本論文の研究対象である「語・語彙」に関する様々な議論が展開される。語とは何か、語彙リスト開発の歴史、語彙と第二言語能力の関連性、伝統的な語彙能力の測定法、語彙の豊かさの測定法とその問題点、頻度情報を利用した語彙の測定、語の過剰使用と過少使用に関する研究、最後に学習者の語彙分析について数多くの先行研究を紹介しつつ、使用語彙研究においては、「語彙の豊かさ」と「特徴語」を分析することが重要であると主張する。

第三章は語レベルよりも大きな単位である Multi-Word Units (以下 MWUs と略)について解説する。最初に MWUs 研究について、伝統的アプローチと頻度アプローチを説明し、MWUsを分析する方法としては、コロケーションとN-gramsの分析が有効な方法であると主張

する。その後、学習者が使用する MWUs について、その理論的背景と先行研究を概観する。

第四章では、第一章から第三章の研究方法を総括した後に、本論文では日本人フランス語学習者の口頭産出における語彙特徴を、①語彙の豊かさ、②特徴語、③コロケーション、④N-grams という四つの観点から計量的および質的に分析すると述べる。第五章から第八章がその分析結果であり、この部分が研究成果の中心的部分と言える。

第五章は、日本人フランス語学習者の語彙の豊かさを分析する。語彙の豊かさを測るために、使用語彙に五つの頻度層を設定する。1位から1000位までの機能語(以下、K1機能語と略)、1位から1000位までの内容語(K1内容語)、1001位から2000位までの語(K2)、2001位から3000位までの語(K3)、それ以下の語(Off-list)の五つの頻度層である。こうして各頻度層における使用語の頻度(トークンとタイプ)およびギロー値と呼ばれる指標を利用して、学習者コーパスと母語話者コーパスを比較する。結果として、タスクに基づくコーパスと自由会話コーパスの両方において、ギロー値を用いた語彙の豊かさの測定法が最も信頼性が高かった。学習者と母語話者の間の相関係数を求めたところ、K1機能語のギロー値のみが異なることが分かった。このことからK1機能語のギロー値を調べることで、ある程度まで学習者の言語能力を測ることができると考える。さらに主成分分析を行って、学習者と母語話者の語彙の豊かさを比較したところ、総じて母語話者グループが学習者グループよりも語彙が豊かであった。また自由会話コーパスでは、語彙の豊かさが高い上位グループは留学経験を持ち修士以上に在籍する学習者であり、下位グループは留学経験のない学部生であり、言語能力の高い学習者は母語話者の語彙の豊かさに近いということが分かった。

第六章は学習者の特徴語を分析する。対数尤度比とギロー値を指標として特徴語を抽出したところ、タスクに基づくコーパスも自由会話コーパスも特徴語のほとんどが高頻度語(K1機能語かK1内容語)であった。特徴語を品詞別に分類したところ、過剰使用語は名詞や代名詞が多く、過少使用語は副詞や多義語であった。

第七章のコロケーション分析では、特徴語を中心に調整頻度が20以上の語彙について、左右3語の共起関係を調査し、学習者と母語話者によって特徴語のコロケーションがどのように違っているか分析した。その結果、タスクに基づくコーパスでは、学習者に①人称代名詞主語の過剰使用が見られ、②初級学習者は否定辞 *ne* を保持する傾向にあり、③依頼表現における法選択や④意味的・統語的選択に違いが見られた。また、母語話者は一人称複数代名詞として *on* を、学習者は *nous* を使用する傾向にある。さらに母語話者には、語の省略、俗語やディスコースマーカの使用も見られた。

一方、学習者の自由会話コーパスでは、語や句の繰り返しが特徴的であった。また能力レベルに起因する違いも多く見られた。たとえば、初中級学習者は *est-ce que* 型の疑問文を有意に多く使用し、上級学習者は母語話者と同様にイントネーション型の疑問文を使用する。上級学習者は単語がうまく出てこない場合や言葉につまった際に、*comment dire* 等の MWUs を使用することで沈黙を回避していた。学習者はレベルに関わらず、関係代名詞文や強調構文等の複文を使用することが少なく、ディスコースマーカも過少使用される傾向にある。

第八章ではコロケーション分析におけるよりもさらに大きな語連鎖について、N-grams 分析を行った。その結果、タスクに基づくコーパスと自由会話コーパスのいずれにおいても、学習者の発話が頻度の高い N-grams に依存しながら組み立てられていることが明らかになった。次に特徴的な N-grams の頻度層を分析したところ、過剰使用語のほとんどが高頻度語 (K1 機能語と K1 内容語) に属しており、逆に、過少使用語のほとんどは低頻度語であった。特徴的な N-grams を質的に分析したところ、学習者と母語話者の違いについては、コロケーション分析とほぼ同じような結果が得られた。

第九章は結論であり、第五章から第八章までに行った分析と考察をまとめた後に、今後の展望と課題に言及している。

【公開審査の概要】

公開審査は、2013 年 9 月 30 日(月)14:00~16:00 に、東京外国語大学事務棟の中会議室において実施された。まず最初に、杉山氏からパワーポイントを用いて博士論文の内容説明があった。その後、各審査員から質問がなされ、それぞれに対して杉山氏から回答があった。

【博士論文の評価】

本論文は、フランス語の学習者言語について、科学的手法を用いて外国語教育研究を行った先駆的な業績と言える。日本語を母語とするフランス語学習者の言語をこれほどまでに詳細に分析した研究は類例がなく、研究テーマの重要性と妥当性は審査委員全員が認めるところであった。

杉山氏は、第一章から第三章の中で、フランス語、英語、日本語の各分野における言語コーパスの構築とその分析の歴史について記述し、様々な方法論の類型化を試みている。同氏はまた、先行研究を広く渉猟し、そこに現れた基本概念を網羅的にまとめ、言語コーパスの長所と短所についてもバランスよく解説している。

本論文は論旨展開が明快であり、言語分析においても優れた方法論に基づきながら研究を展開することができている。杉山氏は、フランス語学習者の言語を分析するために、既存の研究プロジェクトにおいて構築された言語データを利用するだけでなく、自らも積極的に学習者言語コーパスを構築し、実証的なデータ解析と妥当な統計分析を通して、具体的かつ複眼的な考察を行った。なかでも審査委員が高く評価したのは、以下の諸点である。

- ①話し言葉コーパスについて母語話者と学習者のパラレルなコーパスを作成した点、
- ②タスク別のデータ収集を行った点、
- ③タスク別と自由会話による複数の学習者コーパスを構築した点、

である。とくに、タスク別コーパスはコーパスデザインとしても画期的とすることができる。同時に複数の学習者言語コーパスを構築したことで、タスクごとの分析や、異なる学習レベルにある学習者間の比較、母語話者との比較など、多面的な観点から学習者言語の分析を行うこと

ができた。そうした綿密なデータ記述とその統計分析を通して、たとえば人称代名詞 *on* と *nous*、否定辞 *ne* の脱落、学習者における条件法の選択、ディスコースマーカ―の利用、動詞と副詞の共起関係等、今後のフランス語教育研究にとって有益な材料がたくさん示された。この点も審査員によって高く評価された。

一方で、論文の構成上のいくつかの改善点、今後への課題が指摘された。

論文中では図表が多数使用されているが、このうちの幾つかの図表は付録あるいは参考資料に回し、図表のリストを巻末に添える等の工夫があれば良かった。

杉山氏は本研究の目的をフランス語学習者の中間言語の様相を明らかにすることと位置づけている。確かにフランス語学習者の第二言語習得を明らかにするという意図から、初級、上級、母語話者の言語コーパスの比較を試みているが、結果として、それらのコーパスの間にどのような違いが見られたかといった事実の記述が中心となっており、中間言語の発達という観点からの考察が若干希薄であった。また、学習者コーパスから得られた過剰および過小使用傾向を、現場の教師への示唆にどのようにしてつなぐかという点についても、筆者自身の見解を示して欲しかった。

こうした審査員からのコメントは、もちろん本論文の質と水準に直接的に関わるものではなく、むしろ今後の研究の発展に期待しつつ、叱咤激励する意味を込めて述べられたものであった。

最後に付言しておくが、杉山氏は本博士論文の他に、学術論文 14 本を執筆し、国際学会においても 5 回の研究発表を行っており、既に研究者として独り立ちしていると言える。

【審査委員会の結論】

本論文は内容、構成ともに堅実なものであり、本学の博士号授与要件を満たしている。杉山氏は当該分野において学術的な貢献をなし得るだけの高い研究能力を備えており、将来にわたり研究者として十分に活躍できるものと判断される。以上により、審査委員会は、全員一致で、学位申請者に学位を授与することができるという適当であるという結論に達した。